茶席饗宴 — 日本茶道示範

人見スマ子

日本裏千家淡交會 • 台北協會

摘要

茶は南アジアを原産地とし、中国に伝わって解毒用等に飲まれていましたが、しだいに嗜好として流行するようになりました。八世紀半ばの唐の時代、陸羽が「茶経」を著し、茶の期限、造り方、飲み方等を詳しく論じています。そのころのお茶は、茶葉を蒸して固めた団茶を粉にし釜の湯に溶かして飲むのでした。日本における茶は、唐に渡った僧たちが帰朝の折りに 来したの 始まりといわれます。延暦二十四年(805)最澄とともに戻った大僧都永忠が茶の実を比叡山の麓(現在の滋賀県坂本、日吉大社に植えたと伝えられています。けれども、そのころは茶の量も少なく、貴族、僧侶ら限られた人が飲むだけでした。現在のような茶の隆盛は、鎌倉時代萌芽が見られます。

臨済宗を修めた栄西禅師が宋から喫茶法を持ち帰り、禅の修行ととも抹茶を

嗜んだと伝えられています。鎌倉幕府の三代将軍、実朝公が病気になったとき、栄 西禅師が薬にと茶をすすめ喫茶養生記を差し出すや、実朝公は快方に向かったといゆこ とです。栄西禅師が持ち帰った茶の実は、肥前平戸島や築前振山に根づき、今日でも茶 園が広がっています。さらに京都梅尾の明恵上人が茶の木をもらいうけて育て、栂尾茶 は「本茶」といわれるまでになりました。

こうしてお茶は禅の修行と相まって徐々に普及していきましたが、民衆の間には、 奈良西大寺の叡尊僧正が蒙古襲来の際に行った献茶式で茶を振る舞ったのに始まるよう です。

さらに時代が下ると、公家、僧侶、武士達は多くの茶を飲み分ける「闘茶」に興じ、民衆は祭礼の時などでの立克茶を楽しみました。一方禅院では、「四つ頭の茶礼」などと儀礼的に飲まれるようになり、「茶の湯」の語も生まれました。そのことになると、他の栽培の中心は栂尾から面積の広い宇治へと移っていました。

時代の南北朝から室町、戦国の世へと変動していくにつれていくのですが、それには茶祖といわれる村田珠光から武野紹鷗、そして千利休大居士よりつづき現在第十代雲斉千玄室大宗匠、第十六代坐忘斎千宗室様々がつづいています。

流儀作法を習うだけでなく、道を修め、学を究めて、その本質に少しでも近づこ うという意欲を持つことが茶の湯を歩む人の心構えとして必要不可

欠なものになるのです。「道、学、実」の三位一体の修行、実践場であります、「和 敬清寂」の四文字に集約される茶道精神は、平和を愛する人類普遍の理念として共感を 呼び国際的にも茶道への関心が高まっています。 譯文 (劉素真 譯)

茶雖然原產於南亞洲,作爲解毒用品,被當爲一種飲料,從中國傳來,接著就成爲一種嗜好而漸流行開來。

八世紀後半的唐朝,陸羽撰寫《茶經》,關於茶的收藏期限、做法,是先經過蒸過,揉成團茶,再磨成粉,注入熱水溶解再喝掉。日本的茶首先是由歸國的遣唐使帶進來的。傳說在西元805年(延慶24年)同最初一起歸國的大僧都永忠,將茶的種子種在比叡山麓(現在的滋賀縣坂本)日吉大社。但是,當時產量非常少,只限於貴族、僧侶們才能飲到。茶能像現在一樣的興盛,是從鐮倉時代開始萌芽的。

接著修行臨濟宗的榮西禪師將喫茶法帶回國內,從此,抹茶和禪的修行劃上等號而廣受歡迎。

鐮倉幕府的第三代將軍,實朝公生病時,榮西禪師推薦茶與藥的配合的喫茶養生記, 也因此使實朝公病情快速復原。榮西禪師帶回來的茶種,種在肥前平戶島和築前山等地, 也使這些地方發展成茶園。京都的明惠上人更一步培育之,一直到新種木尾尾茶多成「本 茶」(茶中極品)爲止。

從此,茶與禪的修行相輔相成,漸漸普及化,傳到一般民間大眾,則是使於,蒙古來 襲時,奈良西大弄的叡尊僧正,舉行獻茶式之後。

時代再往下算更發展出,公家,僧侶,武士們之間興起。分飲式的「闘茶」,一般民眾 在祭祀時,享用「立克茶」等,同時在禪院裡也有依「四歌的茶禮」等禮儀的飲茶方式,「茶 會」用語跟著產生。到此時,茶的栽培中心從木尾尾移到面積寬廣的宇治。

從南北朝轉入室町,戰國的時代,茶的傳承也由被稱爲茶祖的村田珠光,武野紹鷗再傳到千利大居士,現在的第十代雲齊千玄室大宗匠,第十六代坐忘齊千宗室等代代相傳至今。

茶道不只是學習飲茶的形式而已,透過修到,鑽研學問,直取茶道本質,這樣的態度 是學習茶道人不可不或缺的。「茶道」是「道、學、實」三位一體的修行與實踐的場所,希 望能喚起共同愛好和平的人類,對茶道中「和敬清寂」四字的茶道精神產生共鳴,也提高 國際間對茶道的關心。

現場示範照片



